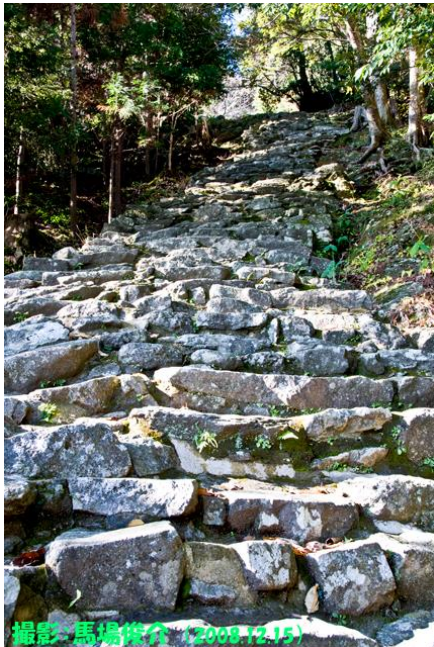


和歌山県

街道 1

和歌山県は三重県同様、道路遺産としては、国史跡でかつ世界遺産でもある「熊野古道」が中核となる。三重が熊野から伊勢に向かう伊勢道だったのに対し、和歌山側は朝廷から高野山へ経て熊野に至る最重要区間であり、そこに見られる遺産群も中世にまで遡るものが多い。

石畳・石段という観点からは、神倉神社の石段（新宮市、永仁 7（1299）以前、国史跡・世界遺産）**A** が最も壮大で、他の石段には見られない「時代を経



撮影：馬場俊介（2008.12.15）



撮影：馬場俊介（2008.12.15）

た荒々しさが感じられ、感動的ですらある。源平合戦における熊野の功労を賞して建久 4（1193）に源頼朝が寄進したものと伝えられている。大胆に石を組み合わせた 538 段の急勾配の石段は、築造以降の修繕が度々あり、自然石・切石等が混在している。

熊野参詣の終点に位置する那智大社のシンボル、那智滝へ降りていく石段（那智勝浦町、鎌倉期？、国史跡・世界遺産）**A** も、神倉

神社の石段などと一緒に造営されたとの伝承があるが、神倉神社の石段と比べると造り方にかなりの差がある。より後世の作と見るか、造営者の違いと見るかは微妙なところである。

街道 2

熊野古道に関わる石畳は数多く残っているが、それらの中で最も有名で、最も美しいとされているのが大門坂（那智勝浦町、江戸期、国史跡・世界遺産）

A である。全長 654m、石畳としては決して長い方ではない。ただ、杉木立と合体し、高低差約 100m の間に微妙な間隔で石段が混在する風景は素晴らしい。江戸以前か

ら何らかの石畳が敷設されていたとの説もあるが、現在の石畳は、那智大社の嘉永の造営に合わせ新たに造営されたものと推測される。前記の那智滝への石段と距離は近いが、

異なる石材が用いられており（前者は地元の花崗斑岩、後者は砂岩）、時代だけでなく、造営者も異なっていたと考えられている。



撮影：馬場俊介（2008.12.15）

街道 3

高野山に向かう最重要の高野街道（大門口）の天野峠に日本最古の道標である上天野の題目塔道標（かつらぎ町、建治 2（1276））**A** が建っている。別の目的で用いられた石材が後世に道標化されたものを除けば、わが国で 2 番目に古い道標は大阪の田能中畑の供養塔道標（1451）であり、200 年近く時代が下る。そして、3 番目が高野山の子継峠にある地藏道標（1512）で 16 世紀に下る。中世の道標はかくも稀少なものであり、かつ、高さ 246cm は江戸初



期以前に建立された全道標の中で最大の大きさである。高野山町石が石造化する前（平安時代中後期）にあったとされる木製卒都婆を思わせる特異な形態も、他に例がない。建立位置は慈尊院・天

野・三谷から高野山へ行き来する辻で、天野路の始点になる「天野辻」であったという説がある。その場合、高野山へ続く神聖な道である天野路へ入る始点である天野辻に結界としての役割を持つ木製卒都婆が平安時代中後期に同位置に存在し、それが後に石造化されたというのが有力な説である。

街道 4

世界遺産関連の最後は、高野山の町石（ちょういし）群である。古さでは、大阪の勝尾寺町石（一〜七町、1247）、三重の廃補陀落寺町石（基石・四丁石、1253）に次いで古く、文永 3(1266)を筆頭に弘安 8(1285)までに建立されたものが 176 基現存する。町石はす



べて御影石製の五輪塔で、建立時の高さは 3 m で統一されていた（町石としては最大規模）。年代、規模、格式などすべての意味で日本を代表する町石群である。その中でも格式という点

では、木下浩良氏により紹介された逸話が面白い。例えば、高野山・慈尊院道町石の百六十一町石（文永 3（1266）、国史跡・世界遺産）**A** [左下の写真] は、正面に「(梵字) V」、右面に「文永三年十月四日園霊寺」、左面に「為大塔勸進上人良印也」、背面に「(梵字) 四町 二十町」と刻まれている。文永 3（1266）に建立された時点では奥の院道の四町石（建立者：覚敷?）、それが、後嵯峨上皇により抜き取られて奥の院道の二十町石に転用され、さらに翌年には高野山の山主検校・覚伝により奥の院道二十町石から抜き取られて慈尊院道の百六十一町まで格下げ移動されてしまった。これは、有力者が、少しでも空海に近い場所での町石建立を望んだためと説明されている。本来、個人の信仰の深さを示す町石建立にかかわるこうした人間臭い経緯は、当時の人々の考え方を知る上で興味深い。

舟運 1

和歌山らしい舟運遺産としては、大仙堀（湯浅町、江戸期）**B** をあげることができる。興国寺の開祖・法燈円明國師が中国・南宋から持ち帰った金山寺味噌（1254）を起源とする日本の醤油の原点・湯浅に設けられた醤油積出用の船着場である。湯浅湾に注ぐ山田川河口に設けられた内港で、醤油や原材料等を積んだ醤油船が停泊する場所として利用され、「しょうゆ堀」とも呼ばれた。



農業 1

農業分野で特記されるべきものは、現存・現役最古の農業用の切通し水路、中瀬渕のホリキリ（紀の川市、平安期）**A** である。福岡の裂田溝（4 世紀）も



撮影:馬場俊介 (2011.9.26)

一種の切通しではあるが、中鞆のホリキリは長さ約10mと短距離だがV字型の本格的な切通しで、鞆地区最大の用水路・大湯が最初に給水する水田の直前で、真国川に突き出た岩盤を切り開いたものである。室町時代の史料に「ホリキリ」の地名が見られることや水利慣行などから、平安時代にこの地を支配していた石清水八幡宮によって造られたと想定されている。

農業2

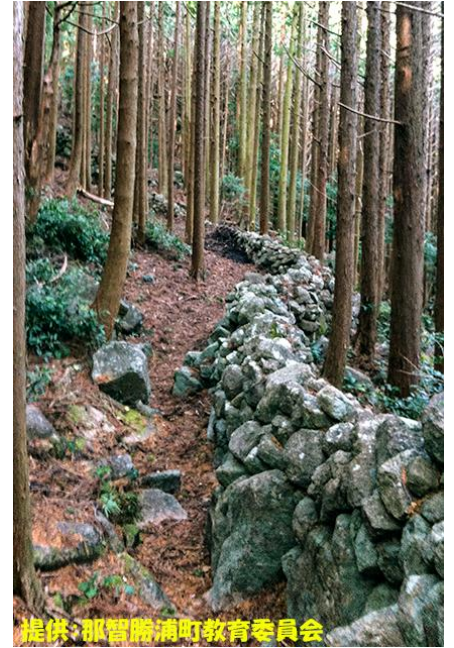
飢饉に備えて米を備蓄しておく郷倉は全国に見られるが、すべて木造か土蔵造であり石積みで壁を築いた例は他にない。市野々の郷倉(那智勝浦町、江戸期、町史跡) Bは2棟残っているが、残念ながら屋根部が欠損しており、天井部分の構造(恐らく木造)は不明である。風の強い地域に造られた石塀と似ているが、石壁の場合は、程度の差こそあれ下にいくほど幅が広がっているのに対し、市野々の郷倉では完全に垂直である。切石布積みでなく、如何にも日本的な隙間の多い石積み法で、薄い壁構造を安定的に造るにはかなりの技術を必要とする。



提供:那智勝浦町教育委員会

農業3

農作物を猪や鹿の被害から護る猪垣は、全国各地で見られる。長約4キロと中規模の高津気の猪垣(那智勝浦町、江戸期?) Aを敢えて紹介するのは、山間部にありながら区民により保全整備され、杉林内の斜面に石罫が良好な形で残る珍しい存在だからである。木戸跡5ヶ所、猪つぼ4ヶ所も残っているが、普通、こうした山間部の猪垣は接近不能なまま放置されていることが多い。



提供:那智勝浦町教育委員会

漁業1

太地町は日本一の伝統捕鯨の基地として観光的にも有名だが、捕鯨に係わる多くの遺構・復元構造物が現存していることでも知られている。中でも象徴的なのは、復元ではあるが、燈明崎の山見台(太地町、江戸期、町史跡) Aで、広大な海上で捕鯨を行う際に、全体を見渡せる高い位置から船団に指令を出していた指揮所であった。付近の岬に3ヶ所の狼煙場 Bが設けられ、山見で鯨を見つけた時、沖合番所で待機している勢子船と、地方に待機している網船や持双船に、鯨の見た方向



撮影:馬場俊介 (2008.12.15)

を知らせたとされる。伝統捕鯨の方法がシステムとして理解できる点が貴重である。

防災 1

和歌山で最も重要な防災遺産は、広村堤防（広川町、安政 5（1858）、国史跡）**A** である。安政の大地震による津波の後、事業家・濱口梧陵が私財を投じ、“いずれまた来襲する”であろう津波に備え、津波で仕事をなくした漁民や農民等村人を雇用し、4年の歳月をかけて築いた、長さ 654m、高さ 4.5mの



撮影:馬場俊介 (2008.12.14)

巨大な土堤防である。なお、濱口梧陵は、津波の来襲時（夜）にも、自身の田にあった藁山に火を点け、高台にある広八幡神社に村人を誘導して多くの人命を救っている。小泉八雲がこの濱口梧陵の逸話を執筆・発表し、後にその作品を学校教員が要約したものが国語教材として利用された。



提供:湯浅町教育委員会

防災 2

津波関連という点では、深専寺の地震津波記念碑（湯浅町、安政 3（1856）、町有形）**A** も、後世に対する教訓を克明に刻んでいるという点で、江戸時代を代表する津波碑

である。教訓としては、①大地震の際には浜辺に逃げたり船に乗るな、②「津波が起きる時は井戸の水が減ったり濁ったりする」という言い伝えは今回間違っていたので、伝聞に囚われず用心を怠らないようにせよ、③濱邊川筋に逃げず、深専寺門前を通り天神山へ逃げよ、などと事細かに指示されている。

防災 3

上田和隧道（有田市、天保 13（1842））**A** は、呑口（下の写真）・吐口をコンクリート改修、トンネル内は拡幅した上でコンクリート巻立てと、往時の姿は完全に失われてしまっている。しかし、海岸近くの排水不良の土地のために切通しを設けた例は他にもあるが、トンネルを穿って排水した例は全国でも唯一である。上田和隧道は、有田川が増水する度に排水不良で苦しんでいた野村・山地・千田地区の水田を救うための排水トンネルで、千田神社前の馬場頭の上田和から高田浜へ掘り抜き、海へ排水する計画を3つの村の13名が発起人となって立案・提出したものである。工事にあたっては、経費の捻出に苦しみながら4年がかりで完成した。工事面での功労者は白井久蔵で、トンネル東口に明治期の碑が建っている。

防衛 1

和歌山は、大坂の入口にあたる紀淡海峡の東岸にあたることから、多くの台場が築かれてきた。何れも保存状態は良くないが、築造場所がユニークなのが元番所台場（和歌山市、幕末、県史跡）**B** である。海に突き出した長さ 170m、幅 50mの自然の舌形突堤状の岩盤の上に造られている。



撮影:馬場俊介 (2011.9.26)